

# 千利狸の呟き

## ～ アニメ観ますか？ ～

21歳の大学生が企画・脚本を担当した「仏陀再誕」というアニメが、10月17日に公開された。さっそく、公開初日に劇場へ観に行った。原作は再誕の仏陀が語り続ける形式なので、どんな映画になるのだろうと思っていた。主人公は17歳の女子高生という設定、医者も登場する。脇役は大学生、小学生の弟、女優とさすがに若い視点からの作品であった。原作の趣旨を踏まえつつも、アニメならではの自由度をもって現代の物語に解釈し直し、ファンタジックに仕上がっている。特殊効果は実写以上で、一見の価値あり。最後までアメリカングラフティ方式で綺麗に決まっていた。

尚、この映画には自殺予防キャンペーンと収益のネパールへの学校寄付という目的もついている。

どこまで、日本のアニメは進化していくのだろうか？

1971年にテレビアニメとして放映されたタツノコプロの「決断」を、改めてみる機会があった。動きの少ないシーン、戦闘シーンは同じ絵の繰り返し、表情が動かず口だけが動く会話のシーンなど、今の子供たちには紙芝居に見えるだろう。1980年代に「アニメーションとマンガは違う。」という人もいたが、そのころから日本のアニメはディズニーにせまり、かつ超え始めたような気がする。

ある友人は1984年2月公開の「うる星やつら2 ビューティフルドリーマー」が大好きで、水晶球の回りを360度回転するシーンを映画でやりたいと研究していた。(カメラがうつるので、まともにやっては学生レベルでは困難。CG加工でカメラを消せばできるかも知れない?)

1987年3月公開の「王立宇宙軍オネアミスの翼」では、ロケット発射時に氷結がパラパラと落ちるシーンをすべて、一つ一つ手で描いていたらしい。

アニメーターでないとできない根性が必要でややむなし作業と思っていたら、のちに「アポロ13」でハリウッドがCGを使い同様の効果をみせた。

「雲のむこう、約束の場所」、「秒速5センチメートル」の新海誠監督は英国首相：ウインストン・チャーチルと同じ手法（キャンパスにスライドを映して上からなぞって風景画を描く）を用いて、精緻なアニメを作っている。カップヌードルの宣伝に採用された大友克洋も独特な世界だし、海外で賞をとれる宮崎駿シリーズもある。

かつて、昭和に評判だったアニメがアメリカから実写版やCGとなって逆輸入されている。スピードボーイ（マッハ、ゴゴゴゴ）、アトム。また、アニメゲームが映画になった「バイオハザード」シリーズ、ファイナルファンタジー等。

日本人がアニメを実写版にするよりも明らかに費用がかけている作品群である。

政権交代で中止になったが、アニメの殿堂計画ができるくらい日本はアニメ輸出国である。

荒唐無稽な設定もすぐ可能。旅行先で子供がみつけたアニメは、日本が大国に占領されエリア9と名前をつけられるという、あってほしくない設定。実写にはできないカメラアングルと特撮が、筆一つで描ける。収入のない時代に、マンガを持ち込み投稿して食いつないでいた映画監督もいた。

アニメの進化は方向がいろいろで玉石混合だが、面白い作品はまだまだ登場しそうだ。

山 狸